

2019年
11月5日
火曜日

舟木 讓 教授 (キリスト教学・宗教哲学)

「違い」の持つ豊かさを汲み取る

国際化が急速に進み、またSNSの普及によって、多様な人々・言語・文化等々に身近に接する機会が日々増加する中、日本でこれまで当たり前と思われてきた文化・価値観・常識が必ずしも絶対でないということに改めて気づくときが増えている。

海外で生活したり何らかの交渉をしたりするときに痛切に感じられるのが、自らの思いをはっきりと相手に伝えることの重要さではないだろうか。特に日本語は主語が省かれることも多く、また対話する相手が、言葉の奥にある真意をくみ取ってくれ、ことを期待しながら曖昧な表現をすることも多いと思われる。最近「忖度」という言葉は少し否定的に使われているが、本来は、相手の立場に立って相手の心の奥にある思いをくみ取り、互いが傷つかないように配慮する「思いやり」もここには存在

しており、「日本的」な「常識」としてはそれが美德というようにとらえられることもある。

しかし、海外では「はっきり」と自らの思いを相手に言葉化して伝えるいと伝わらないという経験をした方も多いのではないだろうか。自らの思いをストレートに伝えることに躊躇し「謙遜」の意味で沈黙したり、曖昧に表現したりするだけでは当然ながら相手に思いは通じない。ただ、沈黙の奥にある思いをくみ取ろうとすること自体は否定されるべき姿勢ではないと思われる。ただ、ここで留意すべきは自らの考えや「常識」と同質のものを持っている人々との関係を重視するあまり、時に狭い視野で物事をとらえ、自らの経験や知見に収まらない異質なものを無意識に排除しようとする誘惑に負けしてしまうということである。

この世界・社会には本当に多様な人々が共に存在しており、その多様性・異質性に出会うときに困惑や緊張をおぼえ、そこから逃げてしまいたくなることもある。しかし、自らの理解を超えるような多様性・異質性に真摯に向き合うとき、これまでは気づきもしなかった視点や人生観に出会うことが本来はできるはずである。

東京多摩市にあるサンリオのテーマパーク「サンリオピューロランド」で現在上演されているミュージカルの一つに「KAWAII KABUKI」という、ハローキティやダニエルなどのキャラクターが歌舞伎を演じているものがある。ここでは最初にキティーらが中心となったハローキティー一座という歌舞伎グループで「桃太郎」を演じるのであるが、そこに鬼ヶ島から「皆を笑顔にした」と願ってやってきた本物の鬼が

紛れ込むところから新たな展開が始まる。鬼は正体がばれた後、角の生えた鬼は結局一員になれないと絶望し、鬼ヶ島に戻り、自らの角をのこぎりで切ろうとするところまで追いつめられる。そこにこの鬼の思いを知ったキティーらがやってきて、「角があるというのは一つの個性」であって、それぞれいろいろな違いを持っていて当然、と伝え、ハローキティー一座に加わるよう呼び掛け、最後は他の鬼たちも加わって共に仲良く歌い踊り大団円を迎える。

見た目の違い・文化の違い・慣れ親しんだ「常識」の違い等々、本来私たちが生きる世界は数えきれない多様性に満ち溢れている。その現実は今一度向き合い、互いの違いを、この世界を真の意味で豊かにするきっかけとし、真の共生社会を求め続けたい。